

た。
大正に入つて千葉・京都府立・愛知等の医科大学病院に歯科がおかれるが、これらにはすべて東大医学部からの医師が就任している。

明治三十九年の歯科医師法によつて発足した二つの歯科医学専門学校の卒業生が参入してきたのは大正元年のことであるが、大正九年に慶應義塾大学医学部が発足した時、その歯科の主任教授として東京歯科医学専門学校の第一回卒業生の岡田満が就任し、これをきっかけとして、鹿児島県立病院、横浜十全病院、聖路加国際病院などの歯科には歯科医師が就任している。

こうして現在に続くことになったわけである。

(平成十五年十一月例会)

相州小田原藩医・市川氏と市河氏

中西 淳 朗

相州小田原藩の医史については二〇〇二年の六月例会において、蘭方藩医の市川蘭好とその兄隆甫を中心にしてその一部を報告した(日本医史学雑誌第四八巻第四号六六九〜六七〇頁に収載)。今回は前回にのべることが出来なかつた疑問点について報告した。

その一、寛政十年(一七九九)の「蘭学者相撲見立番附」に、西三段目の五枚目に隆甫がのつた理由は何かという問題。昨年四月発行の「啓迪」二十一号に、京都の奥沢康正先生が論文「日本で翻訳された眼科洋書・刊本、写本類から」を発表された。この中にJ・J・プレントクの *Doctoria de morbis oculorum*. Vienna の蘭語版が舶来し、杉田立卿によつて『和蘭眼科新書』と訳され出版されるまでの経過が詳しく図示された。

それによれば市川隆甫が上の蘭語本を購入し且つ宇田川玄随に和訳を依頼。玄随は蘭語写本を四冊作り杉田玄白、大槻玄沢、大森寿安に贈呈したことにより当時の眼科診療が大いに前進した。隆甫の公開行為が高く評価されて番附にのつたと考えられる。ただしこの年の芝蘭堂の新元会に出席したかは不明である。

というのも、その頃に隆甫は小田原に帰り、奥医師となり医学肝煎になったからである。藩医の欠員が生じたための帰国と考えられる。

その二、医学肝煎としての市川隆甫は何をしたかという問題。日常的な藩医としての仕事の外に、高田稔氏の研究によれば、寛政八年に小田原に再入部した大久保加賀守忠貞に、蘭学とは何かを隆甫は講じたという。忠貞の手沢本の中に、みずから写した前野良沢訳「和蘭築城書」寛政二年本三巻一冊、蘭人ケイゼル著・今村英生訳「和蘭馬術書」、また「西洋諸蛮戦争之後紅毛復古稍盛大之話」などがあり、さらに文化

十四年(一八一七)英華堂刊の江馬元弘訳篇『和蘭医方纂要』四巻があった。このことは隆甫が藩公と蘭学を通じて接点があったと考えさせるに十分な史実であるが、これらの蘭学資料が現在どこにあるのかは未調査である。

その三、市河家の出身地と遠州地方の種痘に関する問題。

市川隆甫は文政八年(一八二五)に京都へ遊学したが、その往復において駿河國小諏訪の市河魯庵と親しくなり、弟の蘭好死後、魯庵を招いて藩医にすえた。この魯庵の出身地は駿東郡片浜村字小諏訪で、東海道に沿った村落。彼自身の従弟もおり、町人の兄は沼津に、そして後妻の先夫(湯山氏)が沼津藩水野出羽守の家来であった。かように三島、沼津地方は魯庵のかつての診療圏であった点もあり、彼が天保三年(一八三二)から三年間長崎へ留学したとき、その往復でこの地方の医師と交流したと考えられる。

特に遠州榛原郡平川村の川田鴻齊は魯庵の弟子であり、遠州の種痘はまず川田家に伝来したというが、魯庵の帰国は天保六年(一八三五)であるので、モーニツケ牛痘苗の来日より十四年早い。従って魯庵が牛痘苗を遠州に持ちこむとは考えられない。シーボルトの種痘の話をした程度であろう。嘉永二年(一八四九)頃に遠州に牛痘苗を持ちこめる人物は、二代目市川隆甫以外に居ないのである。

天保八年(一八三七)に市河魯庵が死去すると、後妻の連れ子・恭斉は市川隆甫に養われ、翌年隆甫が死去すると、藩医中村見外の孫・栄達を入れ市川家を継がせた。そして市河

恭斉は魯庵の跡をついだ。中村栄達は市川家をついで二代目隆甫となり、相続後、江戸の鮎沢因禎という医師に学び、後に家譜上の甥、恭斉の子・玄智に種痘術を教えている。

この玄智は佐倉順天堂に学び、明治になって顕道と改名し種痘医の免許をとり、後に性病医となって公立小田原微毒病院に勤務し、囚獄医も兼務して小田原の医療につくした。この顕道の子・顕純が明治三十一年(一八九八)、本郷春木町に市河思誠堂という医療器械店を開き、日本医科器械学会の設立、維持に多大な功績をしたのであった。

(平成十六年四月例会)

***** 紹介 *****

ジョン・ダフィー著 網野豊訳

『アメリカ医学の歴史 ヒポクラテスから医科学へ』

本書は、アメリカ医史学界の泰斗であったジョン・ダフィー(John Duffy)の『From Humors to Medical Science A History of American Medicine』の邦訳である。ダフィーは、トウレン大学医学部医史学名誉教授、メリーランド大学名誉教授であり、アメリカ医史学会会長をもつとめた文字通りのアメリカ医史学の第一人者であった。一九九一年には同学会の終身優功賞を受けている。一九九六年に逝去するまで数多